

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第208次)

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区では、近年、藤原宮中枢部の様相をあきらかにするため、大極殿院の調査を継続的にこなっています。本年度は、大極殿の北方に約1,900㎡の調査区を設定し、2021年4月12日より、発掘調査を実施しています。

まずは今回の調査の経緯を説明します。大極殿院の調査は、戦前の日本古文化研究所の調査にさかのぼり、大極殿院の四周に回廊がめぐること等、基本的な構造が既に知られていました。近年の奈文研の調査によって、大極殿院回廊は桁行14尺、梁行10尺を基本寸法とし、複廊構造を採用していること等、その詳細があきらかになってきています。

従来、大極殿院回廊と大極殿の間は広場(内庭)と考えられてきましたが、2019年度の飛鳥藤原第200次調査において、大極殿の後方を区画する回廊、「大極殿後方東回廊」が発見されました。この回廊は東面回廊から派生し、大極殿院をほぼ2:1で南北に分割します。大極殿院が二つの空間で構成されていたことが、ここで初めてあきらかになりました。

大極殿北方の空間は、前期難波宮等の調査成果に鑑みると、後殿区画としての機能が想定できます。この地点は奈文研が1977年の藤原宮第20次調査で既に調査をおこなっていますが、後世の改変が大きかったこともあり、後殿の発見にはいたっていません。しかし、後殿を想定しうる遺構も確認されており、その可能性が残されてきました。今回の調査区は多くが第20次調査区に重なっています。大極殿



西側新規調査区(北東から)

北方の空間の存在があきらかとなった今、後殿に関わる遺構が残されていないか、現在の調査水準で再検討することが、今回の調査の大きな目的です。

これまでの調査成果の一部を紹介します。第20次調査区の東・西辺に沿って、今回設けた新規調査区のうち、西側の調査区では、南北に延びる瓦堆積を検出しました。幅約3m程度のこの瓦堆積は、調査区を東西に横切る耕作溝を覆っており、都が平城に遷り、この地が耕地化された後に堆積したものとみられます。

この瓦堆積について調べてみたところ、周辺の条里地割の坪境と一致することがわかりました。条里地割の坪境相当地点に瓦や礫が集中する事例は藤原宮内でも複数確認されています。いずれも瓦は細かく砕かれており、条里の坪境にあたる畦畔を里道として舗装するために敷かれた可能性が考えられます。西側調査区では、明治期以降とみられる溝や池も多数検出されていますが、いずれもこの坪境に沿うように掘られていました。条里地割にもとづく土地単位が、近代まで維持されていたとも考えられます。こうした事例を集めてさらに分析をくわえていくことで、藤原宮廃絶後の土地利用の実態もあきらかになってくるでしょう。本調査の成果は、近々お伝えできる予定です。みなさまご期待ください。

(都城発掘調査部 道上 祥武)



条里坪境に堆積する大量の瓦片(北から)